

聖霊降臨後第16主日

「人生の土台」

詩編119：129-136

ルカ6：46-49

(1)

今朝、共に拝読したルカ福音書の6章46節から49節の箇所は、マタイ福音書7章にもある「岩の上」に家を建てた人の譬え(たとえ)とほぼ類似しています。難しいことは何一つないようです。小さなお子さんでも分かる単純明快な譬えといえます。しかし、果たしてそうとばかりいえるでしょうか。

聖書研究といえば、研究する主体はわたしであると思っています。しかし、よくよく考えれば、「わたし」が聖書をではなく、むしろ、「わたし」は研究される側ではないでしょうか。それを忘れて、聖書を研究してやろうとすれば、果たしてどれだけのことが分かったといえるでしょうか。

わたしたちの聖書を読む姿勢が問われています。御言を拝読するといえます。わたしたちは、まず、座して祈り、「こもくは聞きませす。主よ。お話しください」①サムエル記3：9(「……あの童(童)わらへへへ)サムエルのように神の御前に座し

て、祈りの姿勢を整えた時、初めて、「み言葉が開けると光を放って、無学な者に知恵を与えます」(口語訳の詩編119：130)といわれていることが、信仰的事実となるのではないのでしょうか。

音響会社・ビクターのシンボルマークは、蓄音機の前に座り、聞き耳を立てている、あの白黒のフチの小型犬です。その足元には、「His Masters Voice」とあります。なんでも、レコードに亡くなったご主人の声が録音されており、それを蓄音機で聞くと、この「ニッパー」という名前の犬が、聴き耳を傾けて聴き入ったということから、シンボルマークが生まれた、といえます。

朝に夕に、「主よ、主よ。」と申し上げて、主の御前に座し、「My Masters Voice」・「わが主の御声」であると聖書に聞き耳を立てているか否かの姿勢が問われています。イエス・キリストを「主」と信じる者は、主イエスの言うことを聞くだけでなく、「聞いて行つ」ことが求められています。

「聞く」のギリシャ語は、「アリスエオ」です。「アリスエオ」とは、「耳」という意味です。ただ、「聞

く「だけでなへ」「聞き耳を立てる」との意味があります。しかも、「聞く」と「従つ」とは「ジョン・セット」ですから、「ハイ」と返事するだけでなく、聴いて従わねばなりません。主イエスは、真に「聞いて行う人」のことを、「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建てる人」(6:46)と言われました。マタイ7章を見ますと、「岩の上に自分の家を建てた賢い人」と、「砂の上に自分の家を建てた愚かな人」とのたとえです。

しかし、どう考えてもおかしな譬えと思われれます。考えてもみて下さい。わが家を建てるなどという機会は、一生に一度あるかないかであります。ですから、誰でもことにあたり、慎重な上にも慎重に取りかかります。・・・とすれば、一みただけで砂地と分かる土地の上になが家を建てるなどという愚かなことをする人がいるでしょうか。・・・ですから、おそらくは、砂地の土地に家を建てたのではないでしょう。建てた家の環境も土地も同じ条件なのです。しかし、片方の人は災害などというもの、百年に一度あるかないかではないか・・・それで「地面を

深く掘り下げる」ことをせず、「砂地」であることを承知した上で、そこに家を建てた、としか考えられません。ところが、もう一方の人は、万一のことを考えて、「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて家を建てた」ようです。

1996年1月16日早朝5時46分、マグニチュード7の地震が、阪神・淡路に起きました。その時、わたしは教団事務所で理事会に出席していました。当時教団の社会局長でありました。現地視察を命じられ、一週間後、震災地に参りました。神戸市内の建物はことごとく倒壊していました。特に、黒瓦の古い家が阪神地区には多く、瓦の重みに絶えかねて、ほとんどペシャンコです。さらに神戸市の長田地区まで足を伸ばすと、多くの人がカトリック教会に集まっていました。レンガ作りの会堂は跡形もないほど崩れ落ちていました。それでも、そこに救済本部が置かれ、古着やその他の生活物資がおびただしく集められ、炊き出しまで行われていました。

ところが、そこから少し離れたところに、ポツンと無傷で立っている建物が見えました。何とも不思議

議な光景でした。それが「インマヌエル教団長田教会」です。牧師夫婦とお目にかかり、震災時の事情を伺いました。何でも、竹中工務店が手掛けた建物といえます。教会堂を建てるにあたり、土地の調査を念入りにして、地下25メートルまでボーリングをしたといえます。建築費はかかりましたが、レンガ一枚剥がれることなく、無傷で残ったのです。これには、感心するやら、目を見張るばかりでした。玄関の踏み石は、一ミリたりともずれていません。それほど完璧でした。ところが周りの建物は、ペシヤンコになっていました。

2011年3月11日、東北沖のマグニチュード8の巨大地震が起こり、福島原発が爆破しました。その後、原発を建てた土地の調査が始まり、「活断層」という聞き慣れない言葉が、毎日話題になりました。原発という危険な建物を建てるにあたり、どうして、あらかじめ、もっと慎重にボーリング調査をしなかったのかが問われました。目に見えない地下の基礎となる部分が如何に大切であるかという現実を、まざまざと見せつけられました。

ですから、御言を「聞いて行つ賢い人」とは、「地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建てる人」(6:46)であると主イエスはおっしゃいました。

(2)

さて、そうした、普段、人の目につかない・基礎部分にさほど注意を払わないとしたら、「洪水になり、川の水がその家に押し寄せる」と大変なことになります。

2010年、山口県防府一帯は洪水と土砂崩れに襲われました。山は崩れ、山肌は剥き出しになり、河川が氾濫しました。防府市の山の上にあります老人ホームは、一瞬にして、濁流に巻込まれて壊滅状態になりました。わたしの住んでいた近くの佐波川は、いつもは穏やかに流れています。しかし、大雨が降ると、水かさがどんどん増しはじめ、川岸すれすれになり、狂ったかのように、濁流があふれんばかりに押し寄せます。その川沿いに、多くの家が建ち並んでいるのです。

人間の想定を越えた避けられない災害も多くありますが、如何なる土台の上に家が建ててあるかは大切なポイントです。

岩の上に、家の土台・基礎を据えねばなりません。「岩の上」「とは、聖書の御言の上でありますよ。」
 「わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう」と言われた、あの「岩の上」であります。

注目すべきことは、マタイ7章では、「賢い人」と「愚かな人」との区別がはっきりしていることです。短期間に、「コストも安く切り上げ、しかも見栄えする家を建てたとすれば、賢く・スマートな人と評価されるかもしれません。基礎部分の土台を考えなければ、どんな見栄えの良い建物でも建ちます。」
 しかし、人生の土台をまじめに考える人は、深くまでポーリングを念入りにします。

わたしたちの生活を本当に支えているのは、はた目からは見えていない部分があります。しかも、その見えない部分が、いよいよ時、ものをいうのではないでしようか。
 雨が降り、大水が押し寄せ、風が吹き付けて襲いかかってくる時です。摩天楼とまでいわれている高層ビルが立ち並びニューヨークの地盤は岩盤といえます。沖縄本島もまた、島全体が珊瑚礁ですから、岩盤はしっかりとあります。沖縄は、小

さな島ですから川といってもみな短い川です。排水も良いので、洪水の心配はありません。沖縄における問題は、風です。横殴りの雨・風などという程度ではありません。

左右・上からも下からも、雨と風が吹き付けてきます。読谷村では風速60メートルを経験しました。物置が10メートル先まですっ飛びました。沖縄の家は、台風に備えて、今ではそのほとんどがコンクリート造りです。しかし、本土はそうはいきません。鹿児島島のシラス台地のように、フィヤフィヤですから何時も問題になります。そうした土台の上に豪華な建物を建てれば、流されて、ペシャンコになります。数年前、広島でも同じようなことがありました。

平穏な暮らしをしているので、人生の土台など関心がないかもしれませんが。
 たとえばです・・・同じように、教会生活を送っていますが、礼拝に出る・出ないは、自由であります。中には安息日を覚えて、地道に毎週礼拝出席に励んでおられる方がいる一方で、時々の方もおられます。わびわび、大変な思いまでして、礼拝に出席しなくても・・・

と思うかもしれませんが。礼拝で牧師が解き明かす聖書の言葉を真剣に受け止めている方もいらっしやるれば、聖書を自分なりに解釈し受け止めている方もいらっしやるかもしれません——、そこに、たいした違いはないように思われるかもしれませんが。ところが……、寺田虎彦さんが言ったように、災害は忘れた頃にやってきます。思いがけない時に、試練や災難が降りかかります。今は平穩無事であるからと、油断していると、突如、災難や試練に見舞われます。

その時です。人生の土台をどこにすえてきたかが問われます。どれだけ、困難であろうとも、先々のことを考え、手を抜かないで、岩盤に達するまで深く人生のボーリングをしてきたか否かが問われます。

主イエスは「求めよ、捜せ、門をただけ、すべて求める者は得、捜す者は見いだし、門をたたく者はあけてもらえるからである」とおっしゃいました。人生とは、実にそうしたものであり、厳肅なものです。ります。

説教後に讃美歌520番「静けき河の岸辺を」(新聖歌では252番

「安けさは川のごとく」を共に讃美いたします。左上に作詞家「ホラティク・ガテス・スパフォード」とあります。

彼は、ニューヨークの弁護士でした。奥さんはイギリス人でした。子ども4人を連れて里帰りを終え、帰国する時、船に乗り合わせたのですが、ハドソン湾を出たところで、海難事故が起き、船が沈み、奥さんと4人のお子さんが亡くなりました。

その知らせが、当時は、「テレグラム(電報)」で、「主人のもとに届きました。

それまで、スパフォードさんは、日曜日には、一家をあげて礼拝出席をするクリスチャン・ファミリーでした。彼は事故の突然の知らせを受けた時、気が動転します。

しかし、一晩祈り、二晩祈ります。次第に心が静められて、その時の心の内に平安が湧き上がってきたとき、書き留めたのが、讃美歌520番の歌詞といわれています。

2番に、「むらがる仇(あた)は、たかりて、かこめむせむれど、いかなうものひこめまて、のぞみをくなくとも」とあります。が、まひにそう思った思いに捕らわれたのでしょ

う。

4番の歌詞には、「おおねらは、巻
き去られて、地はくすくすする時」と
の心境は、その時の偽りのない思
いでありました。しかも、そうした
台地が崩れ去るような思いの中で、
「ここに安し、神によりて安し」
と、揺るぎない平安の境地に達し
たのです。

人生の試練や災難に遇うか否かは、
信仰ある者と信仰ない者との間に
なんら区別はありません。

人生においては、病氣・失業・交通
事故・離婚の危機・配偶者との死
別・他からの思いがけない非難・中
傷など、次々と、さまざまな雨や風
や嵐に見舞われなとは限りませ
ん。

なかでも、最後の、そして決定的な
試練といえば、やはり死の陰の谷
を歩む時ではないでしょうか。

いずれの時、生ける者と死にたる
者とをさばきたもつ全能者の御前
に、一人立たねはなりません。

その時、「悪しき者は倒れる、正し
い人の家は固く立つ」(箴言11:
7)とあります。人生の土台を手扱
きしてはならないのです。

岩盤に達するまでの土台を据えて
きた者は、このよひな困難にも、心

騒ぐことなく、向かい合つてい
なります。

同盟教団の理事長をなされた「安
藤伸一」牧師は、若い時、神戸湊川
でパゼット・ウィルクスの説教を
聞いて回心したといひます。

毛筆で聖書の御言をしたためる賜
物の持ち主でありました。頼まれ
れば、どこでも、だれにでも、直ぐ
に御言をすらすらとお書きになる。
どこの教会にも、安藤牧師のお書
きになった色紙や掛け軸の御言と
出会ってきました。最後に、「磐上
(ばんじょう)との落款(らっかん)
が押されています。

救いに与った(あずかった)時の御
言が「磐(いわ)の上に家を建てた」
の箇所といひます。何と幸いな生
涯であったことでしょうか、「盤
上」の落款は、ひときわ輝いていま
した。終生、「全能者に信頼を置く
者の家は、固く立つ」と証ししまし
た。

【祈りませう】

天の父よ。岩盤に達するまで、労を
惜しまず、人生の土台を据えるも
のとならせてください。

主イエスの名によって祈ります。

「アーメン」